

尺度使用マニュアル

<尺度名>

自己愛人格傾向尺度 (NPI-35)

<測定概念>

わが国では、自己愛人格傾向の測定について Raskin & Hall(1979)や Emmons(1984)の自己愛人格尺度(Narcissistic Personality Inventory; 以下 NPI)が邦訳・検討されているが、回答方式や因子構造は研究者によって異なっている。そこで、まだ邦訳されていないが、欧米の自己愛人格傾向研究では主に用いられている Raskin & Terry(1988)の NPI を邦訳し、信頼性・妥当性を検討した結果、自己愛人格傾向尺度 (Narcissistic Personality Inventory-35; NPI-35) を作成した。NPI-35 の特徴としては、比較的少ない項目で、自己愛人格傾向の 5 つの側面を評価できること、またその側面には自己愛人格傾向の延長線上に臨床場面で見られる自己愛性パーソナリティ障害の特性が存在しているという点が考慮されていることが挙げられる。

<適用範囲>

基本的には大学生であるが、18 歳以上の大学生や大学院生、短期大学生、専門学校生に適用可能であると考えられる。

<尺度構成手続き>

Raskin & Terry (1988)の NPI を邦訳し、大学生 330 名のデータを探索的因子分析した結果、「注目欲求」「誇大感」「主導性」「身体賞賛」「自己確信」の 5 因子構造 35 項目を得、NPI-35 を作成した。

<信頼性>

大学生を対象として、2 回の調査を行い、両データの揃った 131 名を分析の対象とした。5 尺度別の α 係数は.69 から.93 であり、ほぼ十分な内的整合性が認められた。また、再検査信頼性係数は.77 から.86 であり、高い安定性が認められた。

<妥当性>

因子的妥当性の検証のため、大学生 237 名のデータを対象に確認的因子分析を行った。その結果、5 因子モデルを確認し、モデルの説明力を表す適合度指標 GFI は.73、修正適合度指標 AGFI は.70、比較適合度指標 CFI は.80 であった。5 因子モデルは観測されたデータと高い一致とは言えないまでも、ある程度適合していたと言えるだろう。さらに、構成概念妥当性を検討するために、Narcissistic Personality Inventory-Short version(以下 NPI-S; 小塩, 1998)および Edwards Personal Preference Schedule(以下 EPPS; Edwards, 1954)の顕示尺度、賞賛獲得欲求尺度(菅原, 1986)、自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)との関連を検討した。その結果、ほ

ば仮説通りの相関関係が認められ、全体として解釈可能な結果であったことから、NPI-35の構成概念妥当性がほぼ確認された。

<採点方法>

回答は、「全くあてはまらない(1点)」から「非常にあてはまる(6点)」までの6件法で行う。全項目の合計得点が自己愛人格傾向得点、各下位尺度の合計得点が各下位尺度得点となる。なお、各下位尺度に対応する項目は、「注目欲求(項目番号:16,18,26,11,23,24,6,13,33,22)」、「誇大感(項目番号:34,35,8,29,7,4,32,12)」、「主導性(項目番号:10,2,28,31,9,3,1,27,21)」、「身体賞賛(項目番号:25,17,14)」、「自己確信(項目番号:20,5,15,19,30)」である。

<尺度の使用について>

項目の変更は認められない。下位尺度ごとの使用は可能であるが、標準化データとの比較は困難となる。

<解釈方法>

NPI-35の総得点が高くなるほど、自己愛人格傾向が高いことを示している。また、下位尺度も同様である。

(出典文献)

小西瑞穂・大川匡子・橋本 宰 2006 自己愛人格傾向尺度(NPI-35)の作成の試み パーソナリティ研究

<連絡先>

小西瑞穂(滋賀医科大学医学部精神医学講座)
mizuhok@belle.shiga-med.ac.jp

<無料・有料の別>

無料

<著作権関連情報>

転載は著者の承諾を得ること
尺度を研究で使用した場合は利用を明記すること

(その他)

教示文については尺度のPDFファイル参照のこと。
本尺度を研究で用いた場合、その結果をご一報頂けると幸いです。